

# Bluff Archives News Letter

第1号 2024年10月

発行 NPO法人横浜山手アーカイブス

## 横浜山手に残る境界石

今春は4月11日に横浜山手アーカイブスのメンバーで横浜山手の境界石やブラフ積み等の遺構を見て歩くツアーを実施した。案内人は、横浜市中心部に残る関東大震災以前の古い石積みや景観を記録するWebサイト「横浜古壁ウォッチング」を主宰する鈴木広さん。11名が参加し、西山手24箇所を巡ったツアーから山手地区に残る土地の境界を示す境界石を中心に紹介する。



### 美人坂の敷地境界石群

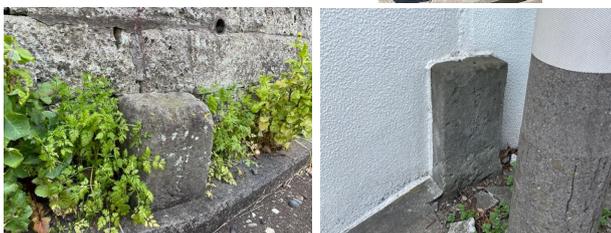
朝10時にJR石川町駅南口に集合し、中村川に沿って車橋方面へ歩く。横浜で最も歴史が古い陶器専門の松本陶磁器店や昭和30年代から地元で親しまれている総合雑貨店 玉川屋商店を通り過ぎ、石川町5丁目交差点へ。そこを左に入ると**牛坂下**。ここは横浜を舞台に数多くの作品を残した小説家・**北林透馬邸跡**。ここに外国人居留地と日本人居住地の境界を示す**居留地境界石**があった。明治32年、居留地制度の撤廃により居留地境界石は役目を終えるが、この牛坂下の居留地境界石は、現在、開港資料館に収蔵・展示されている。

横浜駅根岸道路を行くと、赤い**打越橋**（昭和3年竣工）が見えてくる。その手前に今も水が湧き出ている「**打越の霊泉**」、打越橋の南詰下には**震災復興側溝**がある。関東大震災後、横浜市が新山下に工場を建てて製造し、幹線道路に沿った市街地に設置したものであるが、数多く現存する。

打越橋を渡ってすぐ右へ入ると**美人坂**。ここには居留地の各敷地を区切る**敷地境界石**が3つ（223番乙丙、223番丙丁、224番丙乙）が残っている。道路脇にひっそりと佇む境界石は説明を受けないと見落としてしまいがちな標石であった。



美人坂の敷地境界石



地蔵坂下の居留地境界石

山手7番 敷地境界石

### 当時の場所に今も残る居留地境界石

山手本通りから地蔵坂を下り、狭い脇道へ案内される。ここには「居留地界」の文字が残る**居留地境界石**があった。大谷石のブラフ積み擁壁を背に谷側（当時の日本人居住地）を向いて野草に囲まれて立っている。大きさは尺貫法で言えば、約8寸×6寸。右側面には「神奈川縣」の文字が刻まれているため、牛坂下の居留地境界石より時代は新しく、明治8年に行われた山手居留地の測量を元に設置されたと見られる。文字を判読できる状態で当初の位置に残っている居留地境界石はここだけであり、貴重なものだと言えよう。

### 山手居留地最古の敷地境界石か

山手本通りから右へ少し下ると、**山手7番の敷地境界石**がある。慶応3年に設置された山手居留地最古の敷地境界石ではないかと言われている。壁に埋め込まれているが、「7番」という文字もはっきり読める。慶応3年6月24日（1867年7月25日）横浜山手の地は居留外国人に向けて開放され、土地の最初の競売が行われた。100坪あたり年間12ドル、坪あたりの最低価格が12セントと非常に高い賃料のため、少区画しか売れないだろうと思われていた。実際、最初の6区画は入札者がなかったが、第7区画（山手7番）において初入札者が出て、以降多くの区画で活況を呈したと当時の英字新聞（「The Daily Japan Herald」）に書かれている。まず山手1番から100番まで、次いで101番から200番まで、明治3年には230番までの158区画に買い手がついたと言われる。関東大震災や幾多の土地所有者の移り変わりを経ても現存する境界石、山手の地番はほぼ踏襲されているだけに150年を経ても町の歴史の辿ることができる。今も残る標石を見つけるディープな山手散策も面白いかもしれない。（N）

<参考資料>

『横浜山手 -横浜山手洋館群保存対策調査報告書-』1987年 横浜市教育委員会「横浜古壁ウォッチング」<https://furukabe.com>